

## 秋田県の無居住化集落の管理水準と元住民の居住形態 Uninhabited Villages in Akita and Distributions of Former Residents

○林直樹\* 浅原昭生\*\* 関口達也\*\*\*

Naoki HAYASHI Akio ASAHARA Tatsuya SEKIGUCHI

### 1 調査・分析の趣旨

無居住化集落は「廃村」と呼ばれることもあるが、必ずしも「放棄された集落」ということではなく、元住民を中心に耕作などが続いていることも珍しくない。本稿では、無居住化集落の管理水準に対する「元住民の現在の居住形態（分散的・集住的）」の影響を検討した。筆者らは、集落管理上、「集住的」のほうが有利と考えている。管理水準をみるため、次の3点、田畑、家屋、神社に注目した。

### 2 調査の概要

#### (1) 調査対象

秋田県の無居住化集落に関する佐藤の調査記録<sup>1)</sup>から後述の3条件のすべてを満たす集落を抽出した(62地区)。抽出条件は次のとおりである。①最盛期戸数が5戸以上である。②ダム建設を主因として無居住化した集落ではない。③営林事業のために形成された集落ではない。なお、前述の記録には、戦後開拓集落、鉱山集落は含まれていない。

#### (2) 調査方法

**無居住化集落の管理水準などに関する調査**：2015年秋(全12日間)、無居住化集落の田畑、家屋、神社などについて、林・浅原が目視で調査した<sup>2)</sup>。

**元住民の現在の居住形態に関する調査**：現地協力者・佐藤晃之輔氏からの情報、ゼンリンの住宅地図を使って、無居住化集落のひとつひとつについて、元住民の現在の居住形態を明らかにした(浅原が担当<sup>3)</sup>)。

### 3 分析の結果

用語の定義を表1、転出後の集住の有無などの影響を表2、関連の強さ(ユールの連関係数)を表3に示す。年最深積雪量<sup>4)</sup>や無居住化の時期<sup>1)</sup>は比較・参考用である。田畑の発見率、家屋の発見率、神社の発見率のいずれについても、「転出後の集住あり」のほうが「転出後の集住なし」の場合よりも高い。ただし、ユールの連関係数を見るかぎり、家屋以外については、年最深積雪量や無居住化の時期の影響のほうが大きい。

**分析の限界**：転出後の集住の影響について、筆者らの仮説と整合するような傾向が見られた。ただし、ケース数が62と少ないためか、統計的な有意差は見られなかった<sup>5)</sup>。今後、追加的な調査を行い、仮説を検証したい。

\*金沢大学人間社会学域地域創造学類 School of Regional Development Studies, Kanazawa University

\*\*Team HEYANEKO \*\*\*中央大学理工学部 Faculty of Science and Engineering, Chuo University

無居住、元住民、集住

表 1 本稿における用語の定義／Table 1 Definitions of terms used in this report

| 用語     | 定義                                    |
|--------|---------------------------------------|
| 転出後の集住 | 元住民 <u>5戸以上</u> が地理的に集まっている。          |
| 田畑     | 無居住化集落の田畑：耕作中のもの。                     |
| 家屋     | 無居住化集落の家屋（学校・神社・寺を除く）：建物として機能するもの。    |
| 神社     | 無居住化集落の神社（人が入ることができるサイズ）：建物として機能するもの。 |

表 2 無居住化集落の管理に対する影響

Table 2 Effects on Management in Uninhabited Villages

単位：%

| カテゴリー（ケース数）           | 田畑発見率 | 家屋発見率 | 神社発見率 |
|-----------------------|-------|-------|-------|
| 転出後の集住：なし（29）         | 51.7  | 69.0  | 24.1  |
| 転出後の集住：あり（33）         | 69.7  | 81.8  | 33.3  |
| 無居住化の時期：昭和 49 年以前（41） | 53.7  | 78.0  | 22.0  |
| 無居住化の時期：昭和 50 年以降（21） | 76.2  | 71.4  | 42.9  |
| 年最深積雪量：100cm 未満（44）   | 75.0  | 79.5  | 31.8  |
| 年最深積雪量：100cm 以上（18）   | 27.8  | 66.7  | 22.2  |

表 3 ユールの連関係数／Table 3 Yule's Q

|                          | 田畑：<br>未発見／発見 | 家屋：<br>未発見／発見 | 神社：<br>未発見／発見 |
|--------------------------|---------------|---------------|---------------|
| 転出後の集住：なし／あり             | 0.36          | 0.34          | 0.22          |
| 無居住化の時期：S49 年以前／S50 年以降  | 0.47          | -0.17         | 0.45          |
| 年最深積雪量：100cm 未満／100cm 以上 | -0.77         | -0.32         | -0.24         |

（計算方法）2×2 の集計表を作成し、それぞれについてユールの連関係数を求めた。絶対値が 1 に近いほど関連が強いと考えることができる。

謝辞：元住民の現在の居住形態に関する調査について、佐藤晃之輔氏から多大なるご協力を得た。記して厚くお礼申し上げる次第である。本研究の一部は、平成 27 年度国土政策関係研究支援事業「将来的な再居住化の可能性を残した無居住化に関する基礎的研究：農村再生に向けて（代表研究者：林直樹）」の助成を受けたものである。

1) 佐藤晃之輔『秋田・消えた村の記録』無明舎出版、1997 2) 隣接集落との境界と思われる場所およびその近くでは、若干の誤りが存在する可能性がある。1 地区当たりの調査時間は 45 分であった。そのため、集落の奥地側の辺縁部は調査対象に含まれていない。 3) 浅原昭生・林直樹『秋田・廃村の記録—人口減時代を迎えて』秋田文化出版、2016 4) 国土数値情報・平年値（気候）メッシュデータ（3 次）：地形図上で地区名がある場所のメッシュの値（データ整理は関口が担当）。 5) 次の 3 つ、「転出後の集住：なし／あり」×「田畑：未発見／発見」、「転出後の集住：なし／あり」×「家屋：未発見／発見」、「転出後の集住：なし／あり」×「神社：未発見／発見」のそれぞれについて、フィッシャーの直接確率検定を行ったが、有意差は見られなかった。